青森県立美術館
AOMORI MUSEUM OF ART

プレスリリース
PRESS RELEASE

東日本大震災 10 年

あかし testaments

akashi

甚大な被害を及ぼした東日本大震災から今年で 10 年。青森県立美術館では、4 人のアーティストによるグループ展「東日本大震災 10 年　あかし testaments」を開催いたします。時間と共にうすれゆく震災の記憶を、いかに次世代へとつなぎ、教訓を伝えていくか、時代の趨勢から取りこぼされてゆくものに目を向けてきたアーティストたちの作品をとおして考えます。

日本を代表する写真家・北島敬三、韓国・済州島出身で現代美術の最前線で活躍するコ・スンウク、沖縄出身で、今最も注目されている中堅アーティストの一人・山城知佳子、そして八戸市出身で演劇・美術・批評など多方面で才能を発揮した豊島重之（故人）。4 人のアーティストの写真や映像が展示室にともす「灯 = あかし = 証」を通じて、時間がもたらす風化や忘却の暗闇の中に、災厄をのりこえ、共に生きるための世界を照らし出します。

① 北島敬三「UNTITLED RECORDS」より≪青森県外ヶ浜町≫、2011年、顔料印刷　©KITAJIMA KEIZO

展覧会名：東日本大震災10年 あかし testaments（テスタメンツ）
会　　期：2021年10月9日（土）～ 2022年1月23日（日）
休 館 日：10月11日（月）、25日（月）、11月8日（月）、12月13日（月）、27日（月）～ 31日（金）、2022年1月1日（土）、11日（火）
開館時間：9：30 – 17：00（入館は16：30まで）★11月26日（金）、27日（土）、12月18日（土）は 20：00まで開館（入館は19：30まで）
会　　場：青森県立美術館
観 覧 料：一般 1,500（Webチケット1,300）円、高大生 1,000（Webチケット800）円、中学生以下無料
※（ ）内はWebチケット料金。Webチケットはシステム利用料等別途165円が必要となります。
※心身に障がいのある方と付添者1名は無料。
主　　催：あかし testaments 展実行委員会（青森県立美術館、青森県観光連盟）
助　　成：公益財団法人 花王 芸術・科学財団 、公益財団法人朝日新聞文化財団
協　　力：青い森鉄道、ＪＲ東日本青森商業開発
後　　援：在日本大韓民国民団青森県地方本部、青森放送、青森テレビ、青森朝日放送、青森ケーブルテレビ、エフエム青森、東奥日報社、デーリー東北新聞社
陸奥新報社、河北新報社、読売新聞青森支局、朝日新聞青森総局、毎日新聞青森支局、産経新聞社青森支局、青森県教育委員会
参　　加
アーティスト：北島敬三（きたじま・けいぞう）、コ・スンウク（KOH Seung Wook）、豊島重之（としま・しげゆき）、山城知佳子（やましろ・ちかこ）

【注意】マスクの着用、検温、手指消毒等、感染症の予防・防止対策にご協力ください。
新型コロナウイルス感染症（Covid-19）の拡大状況により、
展覧会やイベントの内容等が変更されることがあります。詳細については美術館ホームページでご確認ください。

展覧会
Webページ

【コンセプト】

◆見えにくくなる震災

ここ10年の間に、被災地においては、道路や住宅など社会基盤が整えられ、数々の伝承施設が建設されるなど「復興」が進みました。一方で、東京電力福島第1原発事故直後に出された「原子力緊急事態宣言」は現在も発令中であり、約4万人におよぶ人々が避難生活を強いられているという事実は、未だ震災が続いていることを示しています。性急に求められる「復興」の物語に追いつかない現実は、置き去りにされ、相次ぐ自然災害や感染症の蔓延の中で、しだいに闇に覆われ、不可視化されていくようです。このままでは震災による被害の現実が無かったことにされてしまうのではないか。そのような不安が今、被災地の人々を襲っています。

◆不可視化されてきたものをすくい出す４人のアーティスト

歴史を振り返るなら、自然災害や大事故そして戦争など、人間はたびたび災厄に見舞われてきました。私たちの身の周りは、多くの災厄の見えない痕跡に覆われているのかもしれません。本展に参加する北島敬三、コ・スンウク、豊島重之、山城知佳子は、そうした過去の負の出来事を見つめ、その中で「見えなくなったもの」をすくい取ろうとしてきたアーティストたちです。

◆「地方」をつなぎ「地方」を超える

４人のアーティストはいずれも「地方」と関わりをもって制作をしています。コ・スンウクは韓国の済州島、豊島重之は八戸、山城知佳子は沖縄、と彼ら３人は出身地でもあり活動の拠点ともする地方の場所から創作のための多くのインスピレーションを得ています。北島敬三は長野に生まれ、活動の拠点は長く東京に置くものの、近年の風景の撮影では地方の場所が被写体として多く選ばれています。政治や経済の中心から遠く離れ、時に差別や搾取の対象ともなってきた地方には、多くの「見えなくなったもの」が堆積してきました。彼ら4人の作品は「地方」の記憶を浮かび上がらせると同時に、「中央–地方」という構造そのものを撃つことになるでしょう。

◆「見えなくなったもの」の映像表現を追求する

写真やビデオといったカメラを通じて得られる映像は、４人のアーティストの創作に共通する表現形式です。彼らは常に今現在、私たちを取り巻く世界に起こっていることに強い関心を寄せています。4人を「見えなくなったもの」に向かわせるのは、まさにその日々の出来事を見つめる透徹した眼差しにほかなりません。現実を映しながらも、その現実から完全に独立したものとして存在することで、もう一つの「現実」を生み出す映像表現に、目に見える近い世界から、「見えなくなったもの」の遠い世界へと、観る者を連れ出す大きな可能性を、4人のアーティストは見出しています。

◆「あかし」とは

この展覧会では、過去の暗闇の中に葬られつつあるもの、あるいは葬られて「見えなくなったもの」を照らし出す光を「あかし」と呼びます。「あかし」は暗闇に光をともす「灯（あかし）」であると同時に、ひとつの事柄が確かであるよりどころを明らかにする「証（あかし）」でもあります。「見えなくなったもの」を可視化することに挑む4人のアーティストの作品は、時間と共に私たちの記憶を覆う闇の中から、聞き届けられない小さな声しか持たない者、無念の死を遂げた者など、抑圧された者たちの生の「あかし」を輝かせることでしょう。過去の災厄を見つめる4人のアーティストが展示室にともす「灯=あかし=証」を通じて、時間による風化や忘却がもたらす暗闇の中に、被災地と共に生きるための世界を浮かび上がらせます。

【ゲストキュレーターをまじえた共同キュレーション】

震災という出来事を、より広い歴史の中で、より多角的に捉えるべく、青森県立美術館の担当キュレーター高橋しげみに加え、歴史や政治、そしてアートについて深い思考を巡らせてきた二人、李静和氏と倉石信乃氏が共同キュレーターとして参画しています。

李静和（リ・ジョンファ）

韓国・済州島生まれ。1988年来日。成蹊大学法学部教授。政治思想家。編・著書に『つぶやきの政治思想―求められるまなざし・かなしみへの、そして秘められたものへの』（1998年・青土社）、『求めの政治学―言葉・這い舞う島』（2004年・岩波書店）、『残傷の音―「アジア・政治・アート」の未来へ』（2009年・岩波書店）などがある。

倉石信乃（くらいし・しの）

長野県生まれ。明治大学大学院理工学研究科教授。1989 年「ユリイカの新人」に選ばれ、以来詩作を発表、また美術・写真批評を手がける。写真批評の著作により、1998年重森弘淹写真評論賞受賞、2011年日本写真協会賞学芸賞受賞。1988-2007年横浜美術館学芸員として、ロバート・フランク展、菅木志雄展、中平卓馬展などを担当。著書に『反写真論』（1999年・河出書房新社）、『スナップショット―写真の輝き』（2010年・大修館書店）、『孤島論』（2022 年・インスクリプト刊行予定）など。

【構成・アーティスト】

写真、ビデオ、インスタレーション、ドローイング等　展示予定作品数　計約100点

② 北島敬三「UNTITLED RECORDS」より≪岩手県大船渡市≫、2011年、顔料印刷　©KITAJIMA KEIZO

③ 北島敬三「PORTRAITS」より、顔料印刷　©KITAJIMA KEIZO

ー見過ごされてきた風景を見つめるー

北島敬三　KITAJIMA Keizo （1954ー, 長野県出身東京都在住, 写真家）

40年以上におよぶ写真家としてのキャリアの中で数々の賞に輝き、海外でも高く評価される日本を代表する写真家の一人。1975年、「ワークショップ写真学校」森山大道教室に参加して以降、本格的に写真を始める。初期の活動では、都市の街路を行き交う人々を出会いがしらに捕らえたモノクロームのスナップショットが高い評価を得た。80年代末以降、大判カメラを用いた肖像写真のシリーズ「PORTRAITS」と、日本の地方を巡り、見過ごされ、打ち捨てられた風景を撮影したシリーズ「PLACES」に着手。「PLACES」を前身として、2012年から新たに始めたシリーズ「UNTITLED RECORDS」は、被写体に東日本大震災の被災地を含みながら現在も撮影を継続する。木村伊兵衛写真賞（1983）、伊奈信男賞（2007）、日本写真協会作家賞（2010）、東川賞国内作家賞（2010）。

出品：震災をきっかけにスタートした風景写真のシリーズ「UNTITLED RECORDS」から代表作約30点と、並行して進めてきた肖像写真のシリーズ「PORTRAITS」約30点を展示。

④ コ・スンウク≪石の蝋燭７≫顔料印刷（2010）©Koh Seung Wook

⑤ コ・スンウク≪未知の肖像≫ビデオ（2018）©Koh Seung Wook

ー名指されぬ者らの記憶をすくうー

コ・スンウク KOH Seung Wook （1968ー, 韓国済州島出身・在住, 美術家）

韓国の現代アートシーンの最前線で活躍する美術家の一人。弘益大学（ソウル）で絵画を学び、美術学士号取得。ソウルでの初期の活動では実験的なアートを発信するオルタナティヴ・スペース「プール」のディレクターを務めながら（2007-2009）、ユーモアの中にも社会通念に挑む強い意志を感じさせるパフォーマンスや映像作品を発表している。2012年、故郷の済州島に活動の拠点を移してからは、同地の歴史的出来事に関わる記憶をテーマに、死者という不可視の存在者との対話を促す詩情豊かな写真や映像作品を制作。2006年、「釜山ビエンナーレ2006―二都物語／釜山―ソウル／ソウル―釜山」や2017年、「チェジュビエンナーレ　観光」などの大規模国際展の参加作家にも選ばれている。日本での展示は「民衆の鼓動　韓国美術のリアリズム1945-2005」（2007年、新潟県立万代島美術館他）に続き2回目となるが、旧作を含む大規模な展示は今回が初めて。

出品：第二次世界大戦後の済州島で多くの島民が犠牲となった「済州島四・三事件」をテーマにした映像作品を中心に、新作映像含む約10点。

⑥ 豊島重之主宰モレキュラーシアター公演《Legend of Ho》（2000） photo：Toru Yoshida

⑦ モレキュラーシアター公演《Legend of Ho》（2000）
舞踏家・中嶋夏（左）と豊島重之（右）photo：Toru Yoshida

ー不可視の世界にせまる身体表現ー

豊島重之 TOSHIMA Shigeyuki （1946ー2019, 青森県八戸市出身, 演出家）

精神科医として勤務する傍ら、演劇、美術、批評など多方面で才能を発揮し、生涯八戸を拠点としながらも、10か国を超える海外の舞台で作品を発表するなど国際的に活躍した。東北大学医学部学生時代から、ダダカンこと糸井貫二と共同作業を行うなど、1960年代の前衛のアートシーンに関わる。1986年、劇団「モレキュラーシアター」を結成。先鋭的なパフォーマンスで、舞台芸術の新しい地平を切り拓いた。同団は、1996年、豪州アデレードフェスティバルに正式招待され、同年の「TOKYOジャーナル」年間演劇賞受賞。2000年には八戸市民を中心としたアートプロジェクトの企画集団「市民アートサポートICANOF（イカノフ）」を結成し、キュレーターとしても活躍した。2019年1月、72歳で死去。今秋、評論集『一目散』（書肆子午線）刊行予定。

出品：「阪神・淡路大震災」と「アメリカ同時多発テロ」、二つの災厄に触発されて創られたモレキュラーシアターによる舞台作品《直下型演劇》（2002年）のセノグラフィー（舞台装置）を中心に写真やサウンドインスタレーション、資料等約23点。

⑧ 山城知佳子《あなたの声は私の喉を通った》ビデオ（2009）
©Chikako Yamashiro, Courtesy of Yumiko Chiba Associates

⑨ 山城知佳子《沈む声、紅い息》ビデオ（2010）
©Chikako Yamashiro, Courtesy of Yumiko Chiba Associates

ー言葉未満の声を伝えるー

山城知佳子 YAMASHIRO Chikako （1976ー, 沖縄県出身・在住, 映像作家・美術家）

現在、最も注目される中堅アーティストの一人。映像や写真、パフォーマンスなどによって出身地・沖縄を主題に作品を制作している。沖縄戦や基地問題など歴史や社会の具体的な事象に触れた初期の作品を経て、近年は言葉にならない記憶を伝えるべく、抽象的なイメージやフィクションの要素を効果的に取り入れた作品へと展開が見られる。国境や時代を超える普遍性を獲得した作品は国内外で高い評価を得ている。現在、東京都写真美術館で大規模な個展「山城知佳子　リフレーミング」を開催中（10/10まで）。Asian Art Award 2017 supported by Warehouse TERRADA大賞（2017）、第64回オーバーハウゼン国際短編映画祭ゾンタ賞（2018）、Tokyo Contemporary Art Award, 2020-2022（2020）。

出品：戦争の記憶をテーマにした初期の傑作《あなたの声は私の喉を通った》を中心にあらたに構成された映像インスタレーション、新作映像《リフレーミング》（2021）より写真作品《覚えているか？ 俺たちは珊瑚から生まれてきたんだ》等約6点。

【関連プログラム】

■OPENING LIVE+TALK

2021年10月9日（土）13：30 – 16：00

◎港大尋ライブコンサート：かつて豊島重之作品に出演した作曲家によるパフォーマンス

◎アーティスト+キュレーター クロストーク

参加料無料・要申し込み（申し込み方法等詳細は、当館ホームページをご確認ください）

このほか各アーティスト関連のイベント（トーク、パフォーマンス、上映会等）を予定しております。詳細は、決まり次第当館ホームページでお知らせします。

■ナイトミュージアム

夜間延長時間 17：00 – 20：00

11月26日（金） / 11月27日（土） / 12月18日（土）

■図録

展覧会のコンセプトや、各作家の論考、主要な出品作のカラー図版が掲載された図録『青森県立美術館展覧会図録　東日本大震災10年　あかし testaments』を、11月初旬、株式会社インスクリプトより刊行予定。

デザイン・装丁： 須山悠里 / 予価: 3,900円（税抜）ISBN: 9784900997929

●プレス向け内覧会、オープニングセレモニー、記者会見

2021 年10月8 日（金）

内覧会　12：30 – 13：30（受付開始12：00）

オープニングセレモニー　13：30 – 14：00

記者会見　14:：00 – 14：30

出席者：出品作家、キュレーター

感染症の状況により、プレス向け内覧会の実施を見合わせる場合がございます。

人数把握のため、ご参加を希望される場合は必ず事前にお申し込みいただきますようお願い申し上げます。

【画像のご提供】

下記の本リリース掲載画像をデータでご提供いたします。

① 北島敬三「UNTITLED RECORDS」より≪青森県外ヶ浜町≫、2011年、顔料印刷 ©KITAJIMA KEIZO

② 北島敬三「UNTITLED RECORDS」より≪岩手県大船渡市≫、2011年、顔料印刷 ©KITAJIMA KEIZO

③ 北島敬三「PORTRAITS」より、顔料印刷　©KITAJIMA KEIZO

④ コ・スンウク≪石の蝋燭 7≫顔料印刷（2010）©Koh Seung Wook

⑤ コ・スンウク≪未知の肖像≫ビデオ（2018）©Koh Seung Wook

⑥ 豊島重之主宰モレキュラーシアター公演《Legend of Ho》（2000）photo：Toru Yoshida

⑦ モレキュラーシアター公演《Legend of Ho》（2000）舞踏家・中嶋夏（左）と豊島重之（右）photo： Toru Yoshida

⑧ 山城知佳子《あなたの声は私の喉を通った》ビデオ（2009）©Chikako Yamashiro, Courtesy of Yumiko Chiba Associates

⑨ 山城知佳子《沈む声、紅い息》ビデオ（2010）©Chikako Yamashiro, Courtesy of Yumiko Chiba Associates

（プレスイメージ貸し出し条件）

1　画像は、本展紹介以外の目的で使用しないでください。

2　画像データを第三者に渡すことはできません。使用後、データは消去してください。

3　作品画像は全図で使用してください。部分画像やトリミング、作品に文字を重ねることはできません。

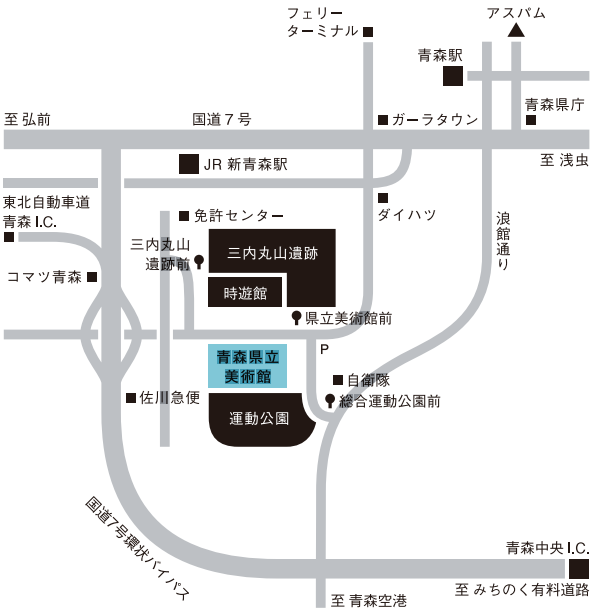
4　画像を掲載される際には、イメージ貸出時に上記クレジットをご記入ください。

5　掲載、放送の際には事前確認のため、ゲラ、掲載誌（紙）または映像のご提供をお願いいたします。

6　掲載誌（紙）は、広報担当あてに一部ご寄贈ください。web サイトの場合は、掲載時にお知らせください。

希望される画像、媒体名、御社名、ご担当者、ご連絡先をお書き添えの上、E-mailでご連絡ください。（ bijutsukan@pref.aomori.lg.jp ）

【アクセス情報】



1 JR新青森駅から車で約10分
2 青森駅から車で約20分
3 青森空港から車で約20分
4 東北縦貫自動車道青森I.C.から車で約5分
［八戸方面から］青森自動車道青森中央I.C.から車で約10分
5 青森市営バス青森駅前（6番のりば）「三内丸山遺跡行き」乗車、「県立美術館前」下車（所要時間約20分）
6 ルートバスねぶたん号JR新青森駅東口（3番のりば）乗車、「県立美術館前」下車（所要時間約10分）

【問合せ先】

あかし testaments展実行委員会（青森県立美術館内）　〒038-0021　青森市大字安田字近野185　TEL：017-783-3000　FAX：017-783-5244
広報担当： 桑嶋智実／学芸担当：高橋しげみ

【AOMORI GOKAN 展覧会情報】
県内の美術施設の展覧会をご紹介します。　https://aomorigokan.com/

□青森公立大学 国際芸術センター青森

・アーティスト・イン・レジデンスプログラム2021 “invisible connections”
2021年9月2日（木）～12月8日（水）
公募による滞在制作プログラム。ワークショップやレクチャーパフォーマンス、展覧会などを実施。カロル・ダッタ、内田聖良、北條知子、村上美樹ほか
・表現のコモンズ vol.5 表層／地層としての野外彫刻プロジェクト「ここにたつ」2021　小田原のどか個展（仮称）
2021年12月25日（土）～2022年2月13日（日）展示棟ギャラリーA
・「ヴィジョン・オブ・アオモリ」特別編　～生誕140周年 大川亮（仮称）
2021年12月25日（土）～2022年2月13日（日）展示棟ギャラリーB

□弘前れんが倉庫美術館

・りんご前線―Hirosaki Encounters
2021年10月1日（金）～2022年1月30日（日）
りんごのテロワール（土壌）としての「弘前」の地に注目し、弘前ゆかりのアーティストたちの作品や当地との出会いで生まれた作品などを紹介。

□十和田市現代美術館

・Arts Towada十周年記念「インター ＋ プレイ」展 第2期
2021年10月1日（金）～2022年1月10日（月・祝）
十和田市現代美術館常設作家であり、世界各地で大規模インスタレーションを展開するトマス・サラセーノの作品を展示。

□八戸市美術館

・八戸市美術館開館記念「ギフト、ギフト、」
2021年11月3日（水・祝）～ 2022年2月20日（日）
八戸を代表する祭りである「八戸三社大祭」を出発点に、アートを通して“ギフト”の精神を見つめる展覧会とプロジェクトを展開。